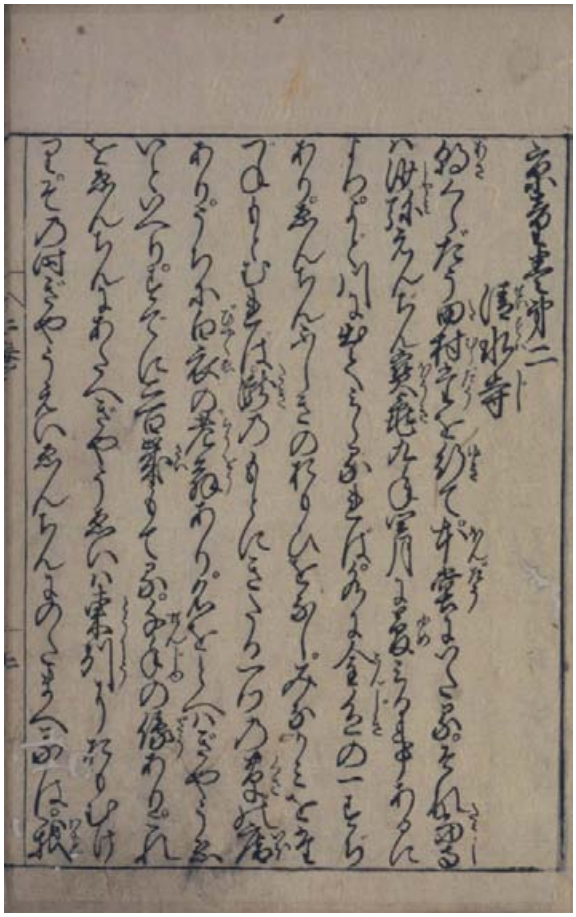
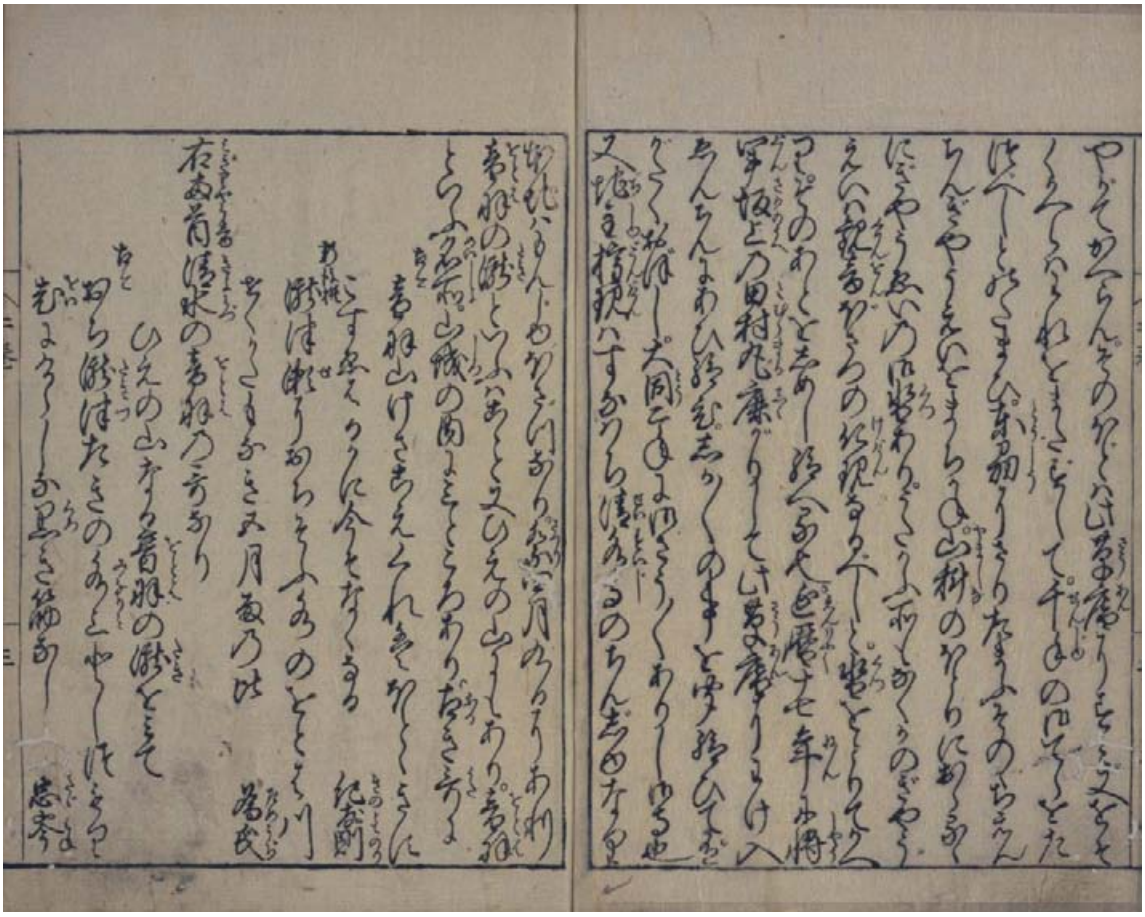
巻二　清水寺



京都府立综合资料馆藏



京都府立综合资料馆藏

京都府立综合资料馆藏

卷二　清水寺

顺着朝仓堂、田村堂的方向走过去，就是本堂。这座寺院的由来是这样的：僧侣延镇在宝龟九年（公元七七九年）四月做了一个梦，之后他来到淀川前，看到河中有一道金色的水流，延镇觉得奇怪就往上游走，来到一座瀑布的脚下。那里有一座草庵。草庵里有一位穿着白色衣服的老翁。问起他的名字，他说叫行叡。行叡有一尊带在身边两百年的千手观音。行叡把这尊佛像交给延镇，就到东方游历去了。临走之前，行叡对延镇说：“我不久就会回来，在我回来之前请你住在这座草庵里。要是我回来得晚的话，就不用等我，去建一座寺庙来供奉千手观音吧。”延镇等不到去东方远游的行叡，在偶然来到山科附近的时候，看到了行叡的鞋子。于是延镇确信行叡就是观音菩萨的化身，把鞋子带回去，向人们展示这一行叡是观音菩萨的证据。

延历十七年（公元七九八年），征夷大将军坂上田村麻吕在猎鹿的时候，来到这座草庵，和延镇见了面。他听说了这件事的经过，觉得这是一件很值得崇敬很难得的事情，于是在大同二年（八〇七年）修建了清水寺。

另外，地主神社是清水寺的镇守神社，（地主神社所供奉的）地主权现被认为是文殊菩萨的化身。祭祀是在每年四月九日。名为音羽的瀑布，在清水寺和比叡山都有。而冠有音羽这一名称的名胜在山城国共有三处。

有这样几首（和清水寺有关的）古老的和歌：

《古今集》

在我今天早上翻越音羽山的时候，恰好听到杜鹃在远处枝头上鸣叫。　　纪友则

《新后撰集》

成为瀑布的一部分流下而发出声响的音羽川，五月的梅雨既不能掩盖住水声，也无法减弱它的水势。

以上两首是吟咏清水寺音羽的和歌。

看到比叡山的音羽瀑布所吟咏的和歌：

《古今集》

汹涌直下的瀑布的上游，一定是因为岁月流逝而苍老了。

因为水流中只有仿佛白发的白色水纹，却没有黑色的。　　忠岑

山科音羽之歌

山科音羽川的小夜千鸟因为自己的力量比不上观音菩萨的功绩，所以才一直不住地鸣叫。　　权中纳言公雅

据说千手观音的誓愿中包括枯树开花，还说只应尊崇自己的教诲，又说“咒咀诸毒药，所欲害身者，念彼观音力，还着于本人”，因为我有眼病，所以为了让其大慈大悲的神力消除我的眼病，我作了这样一首发句：

我为之祈祷的眼睛，在等待着千手观音的慈悲的降临，到那时，山峰上的花便会盛开吧。

（翻訳：張凌志）

（監修：小松謙・林香奈）

【現代語訳】

清水寺

朝倉堂と田村堂を行くと、本堂に着きます。この寺の由来は次の通りです。

僧の延鎮が宝亀九年四月に夢を見て淀川に出てみられますと、川に金色の一筋の流れを見つけました。不思議に思って上流に行くと、滝の元に着きました。そこに一軒の草の庵がありました。そこに白い衣を着た翁がいました。名を尋ねると行叡といい、すでに二百年持っている千手観音の像がありました。行叡はその像を延鎮に与え、東国へ旅立ったのでした。

その時、行叡は延鎮に「私はまもなく帰るが、その間はこの庵に住みなさい。帰るのが遅ければ私を待たず、千手観音のお寺を建てなさい。」とおっしゃいました。

東国に去られた行叡を延鎮は待ちかね、山科のほとりに出られたところ、行叡の御沓がありました。そこで延鎮は疑うことなく、あの行叡は観音菩薩の化身であったと考え、沓を持ち帰り、化身であったというあかしを人々にお示しになったのです。

延暦十七年に征夷大将軍坂上田村麻呂が鹿狩りをした時、この草庵にたどり着き、延鎮にお会いになりました。先の由来をお聞きになり、尊くありがたいこととお思いになって、大同二年にご創建になったのが清水寺なのです。

また、地主権現は清水寺の鎮守社であり、元の仏は文殊菩薩です。祭が四月九日にあります。音羽の滝というのは、ここと比叡山にもあります。音羽という名所は山城国のうちに三箇所あります。古い歌に次のようなものがあります。

『古今集』

音羽山を今朝越えてきたところ、ホトトギスが梢はるかに

今鳴いているのが聞こえる　　紀友則

『新後撰集』

滝に流れ落ちて加わる水の音がする音羽川だが、その音をおさえることも、

水の勢いをとどめることもできない、五月雨のころだ　　為氏

右の二首は、清水の音羽を詠んだ歌です。

比叡山にある音羽の滝を見て詠んだ歌

『古今集』

激しく流れ落ちる滝の上流は、年月がたって老いてしまったに違いない、

流れには、白髪のように白い筋ばかりで、黒い筋が無いから　　忠岑

山科の音羽の歌

山科の音羽川の小夜千鳥が、観音様の御行跡に自分の力が届かなくて、

声に出してないてばかりいることだ　　権中納言公雅

千手観音の誓いでは、枯れた木にも花が咲くとのことで、「ただただ自分の言葉を頼みにせよ」との御誓願や、「呪咀諸毒薬所欲害身者念彼観音力還着於本人（呪咀や毒薬などによって、身体を害そうとする者がいても、観世音菩薩を念ずれば、呪おうとした本人にその効果が還っていくことになる）」ときくので、私の眼病があるかぎりは、大慈大悲の御力で無くしてくださいませと、次の発句を詠みました。

祈る眼は、千手観音の慈悲がもたらされるのを待って、

峰に花が咲く

（岸本惠実・鳴海伸一）